

ブラジルポルトガル語の完了過去形の繰り返しが表す アスペクチュアルな意味と動詞の限界性

ギボ・ルシーラ¹

1. はじめに

本稿では、ブラジルポルトガル語（以下、ポルトガル語）の動詞の完了過去形の繰り返し表現（以下、完了過去形の繰り返し）が表すアスペクチュアルな意味について述べる。ポルトガル語の完了過去形は、基本的に完成相を表す形式であるが、繰り返し用いられる文では継続相または反復相を表す形式として働く。以下、例を挙げる。²

01. O homem esperou pela sua mulher. (その男は妻を待った。)

[Ps] →完成相を表している

02. O homem esperou, esperou, esperou mas, no final das contas, sua mulher não veio. (その男は、長い時間待ち続けたけれど結局妻は来なかった。)

[Ps, Ps, Ps]→継続相を表している

03. Eu pedi um celular novo para meu pai. (お父さんに新しい携帯電話を頼んだ。)

[Ps] →完成相を表している

04. Pedi, pedi, pedi, mas não ganhei um celular novo. (何度も頼んだけれど新しい携帯電話をもらわなかった。)

[Ps, Ps, Ps]→反復相を表している

完了過去形の繰り返しの意味・用法について、Castilho (1967:72) は「Ampliação da duração (継続時間の拡大)」、そして Travaglia (2006 : 238) は「Intensificação da situação (状況の強化)」と説明している。確かに「拡大」と「強化」のニュアンスはあるが、<継続>と<反復>というアスペクチュアルな意味の違いについては記述がなされていない。どちらの意味を表すかは、動詞の時間的な限界の有無によるものである。本稿の目的は、動詞の限界性と完了過去形の繰り返しが表すアスペクチュアルな意味との関係を明確にすることであり、まずは、限界性がない場合は継続相、限界性がある場合は反復相を表すという仮説を立て、考察を進める。

2. 先行研究と動詞の限界性について

本稿では、奥田 (1988)、須田 (2003)、工藤 (1995、2014) の現代日本語のアスペクト研究に従って「限界性」という用語・概念を使用している。当然ポルトガル語でも限界性 (=telicidade) を問題にする先行研究はあるが (BASSO 2007、WACHOWICZ 2008)、本稿での目的を達成するには、日本語研究で行われているようなこの概念に基づいた詳しい動詞分類が必要だと思われる。

奥田は、動詞の語彙的な意味の中での時間的限界＝内的限界の有無を基準にして日本語の動詞を「限界動詞」（変化動詞）と「無限界動詞」（動作動詞）に分類しているが、ポルトガル語でも動詞は同じように *verbos télicos*（限界動詞）と *verbos atélicos*（無限界動詞）の二種類に分類することができる。奥田に続いて、工藤は、＜開始の時間限界＞と＜終了の時間限界＞を区別して日本語の運動動詞を「主体動作動詞」、「主体動作客体変化動詞」、「主体動作主体変化動詞」に分類している。³ しかし、ポルトガル語の研究においては＜開始の時間限界＞と＜終了の時間限界＞という概念はあまり問題にされていない。

更に、動詞の語彙的な意味だけではなく、状況語や修飾語によって文に表れる動詞外的な限界についても日本語の研究は進んでおり、特に須田では＜外的な限界＞について詳しい記述がなされている。須田（2003：163）は、「限界動詞と無限界動詞という動詞の語彙的な意味のレベルと、限界的な動作と無限界的な動作という文の意味のレベル（述語の意味のレベル）とを区別しなければならない」と述べている。ポルトガル語においても同様のことがいえる。ポルトガル語の先行研究には外的な限界について記述がないわけではないが、日本語のようにそれを具体的に取り上げることは少なく、例えば Travaglia（2006：57）は「*verbos atélicos que passam a télicos*」（＝限界動詞に変わる無限界動詞）と表現し、概念の表面的な記述に留まっている。

本稿では、先行研究に倣って内的限界性の有無、開始限界と終了限界、外的な限界という諸概念を用いて動詞分類を行い、用例を分析する。なお、内的限界性があるのは、＜終了限界＞つまり、須田（2003：113）が記述するように「出来事の時間的な展開において、そこにいたれば、出来事が自己をつかいはたして、それ以上進展することのできないような、時間的な境界」があるものとする。これらの概念に従って、ポルトガル語の動詞を次のように分類することができる。開始限界の＋は、動作を開始する意志性の有無、終了限界の＋は、出来事の終わりの限界の有無を意味している。

A) 内的限界性がないもの＝無限界動詞

A-1 主体の動作を表す動詞【＋開始限界、－終了限界】

Estudar, esperar, ler, andar, chorar, etc.（勉強する、待つ、読む、歩く、泣くなど）

A-2 主体の内的情態を表す動詞【－開始限界、－終了限界】

Amar, pensar, sentir, lamentar, etc.（愛する、考える、感じる、悼むなど）

B) 内的限界性があるもの＝限界動詞

B-1 主体の変化を表す動詞【－開始限界、＋終了限界】

Morrer, cair, ir, etc.（死ぬ、落ちる、行くなど）

B-2 主体の動作及び客体の変化を表す動詞【＋開始限界、＋終了限界】

Cortar, dobrar, lavar, fazer, etc.（切る、折る、洗う、作るなど）

B-3 変化をもたらさない（瞬間的な）動作を表す動詞【+開始限界、+終了限界】

Bater, sacudir, chamar, etc.（殴る、揺さぶる、鳴るなど）

C) 動詞外的に限界づけられたもの＝限界的な動作

C-1 主体の動作を表す動詞【+開始限界】+【+終了限界】

Estudar a página 15, ler o email, andar até a estação, etc.（15 ページを勉強する、メールを読む、駅まで歩くなど）

無限界動詞には、主体の動作を表す動詞と主体の内的情態を表す動詞がある。限界動詞には、主体の変化を表す動詞、主体の動作及び客体の変化を表す動詞、変化をもたらさない（瞬間的な）動作を表す動詞がある。そして、もともと動詞の語彙的な意味の中には限界性がないが、動詞外的に限界づけられた動作を表す動詞がある。

上記の動詞分類は、完了過去形の繰り返しの表すアスペクチュアルな意味を正しく理解するのに重要であり、次にこれらの動詞のタイプに分けて用例を分析していく。なお、用例には母語話者から得られたものとブラジルの歌や詩から引用したものがある。以下には（）内に用例の出典を示しており、出典の記述がないものは、筆者の作例である。

3. 完了過去形の繰り返しのアスペクチュアルな意味

完了過去形の繰り返しは、基本的に話し言葉で用いられやすく【Ps, Ps】または【Ps, Ps, Ps】という形で現れることが多い。後者の場合は、【Ps, Ps e Ps】のように接続詞の「e」を伴うこともある。これらにはアスペクチュアルな意味の違いはない。⁴ まずは、用例の数が最も多かった無限界動詞の用例から見ていくことにしよう。

3.1 無限界動詞

無限界動詞は、変化には無関心であるため、時間的な<終了限界>、つまり、主体の動作（または内的情態）が必然的に尽きる時間的な終わりの限界がない動詞のタイプである。日本語の先行研究では、無限界動詞のうち、よく挙げられているのは、動作動詞であるが、本稿では動作動詞と同じく<終了限界>を持たないものとして amar（愛する）、sentir（感じる）などの<内的情態動詞>も無限界動詞として扱っている。以下、主体の動作を表すものと主体の内的情態を表すものを挙げる。

3. 1. 1 主体の動作を表す動詞

05 では、「cantou」という完了過去形の繰り返しが、「歌う」という動作が過去において継続的に行われ、

更に継続期間が長かったことを表している。「声なくなるまで」と共起することで「歌った時間が長かった」という意味合いがより強調される。

05. Ele cantou, cantou, cantou, até ficar sem voz! (声なくなるまで彼は歌い続けた。) (母語話者)

単なる過去の出来事を完的に表す「cantou」とは異なり、「cantou, cantou, cantou」は継続期間（出来事の内的時間）と継続期間の長さに焦点を当てているといえる。そのため、「ficar（完了過去形）＋現在分詞」からなる動詞迂言表現との置き換えが可能である。⁵ 主体動作動詞における完了過去形と完了過去形の繰り返しの意味的な違いを図1と図2のように示すことができる。

図1. 主体動作動詞「cantar」・完了過去形

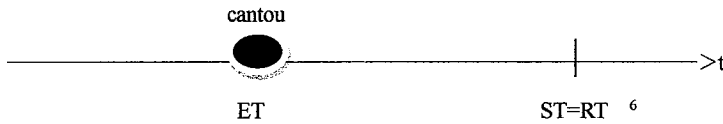
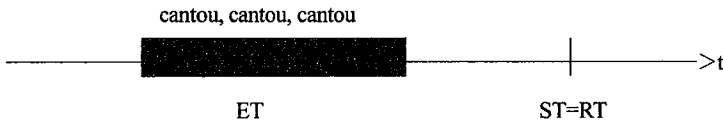


図2. 主体動作動詞「cantar」・完了過去形の繰り返し



次の06でも完了過去形の繰り返しの使用が見られる。

06. Sabiá lá na gaiola fez um buraquinho, voou, voou, voou, voou. E a menina que gostava tanto do bichinho chorou, chorou, chorou, chorou. (サビアは鳥籠に小さな穴を開けて、飛んで飛んで飛んで行った。そしてサビアのことが大好きだった少女は泣き続けた。) (“Sabiá lá na gaiola”, Grupo Anima)

まず、「voou, voou, voou, voou」はサビアという鳥が飛んだということを表しているが、話し手が注目しているのは、飛び立った瞬間ではなく、その後続いた「空中をあちこち飛ぶ」という鳥の動きである。つまり、「飛ぶ」という動作が続いたことを表しているのである。また、「chorou, chorou, chorou, chorou」という完了過去形の繰り返しは、少女が泣き出し、その後、止むことなく泣き続けたことを表している。

以下、07～12の用例でも完了過去形の繰り返しは継続相を表している。いずれの用例においても完了過去形の繰り返しから「ficar（完了過去形）＋現在分詞」への置き換えが可能である。

07. Treinei, treinei, até que decorei a coreografia. (振付を暗記するまで練習し続けた。) (母語話者)

08. Estudei, estudei e estudei, mas não fui bem na prova. (長い時間勉強し続けたけれど、試験は上手くいかなかった。) (母語話者)

09. Ele falou, falou, falou, mas não disse nada. (彼はずっと話し続けたけれど、何も(大した事は)言わなかった。)(母語話者)
10. O patrão pensou, pensou, pensou e aceitou a proposta do funcionário. (オーナーはずっと考え続けて、従業員の提案を受け入れた。)(母語話者)
11. Procurei, procurei, mas não encontrei o meu livro. (長い時間探し続けたけれど、本を見つけることができなかった。)(母語話者)
12. Andei, andei, andei até encontrar esse amor tão bonito que me fez parar. (私を止めたこの素敵な愛を見つけるまで私は歩き続けた。)(“Coração Sertanejo”, Chitãozinho e Xororó)

また、数少ないが、再帰動詞の完了過去形の繰り返しの用例が確認された。13の「pintar-se=化粧する」と14の「aprontar-se=支度する」は、いずれも無限界動詞であり⁷、これらの用例は継続相を表している。繰り返しの方法として、再帰代名詞は完了過去形と一つの形式を成し、動詞と同じ回数で繰り返し現れなければならない。ここでも「ficar(完了過去形)+現在分詞」との置き換えが可能である(13はfiquei me pintando、14はficou se aprontandoになる)。

13. Chorei, chorei, até ficar com dó de mim (自分がかawaiiそうになるまで泣き続けた)
E me tranquei no camarim (そして楽屋に閉じこもった)
Tomei um calmante (精神安定剤を飲んだ)
Um excitante e um bocado de gim (興奮剤とジンを少し)
Amaldiçoei o dia em que te conheci (あなたと出会った日を恨んだ)
Com muitos brilhos me vesti (キラキラした服を着た)
Depois me pintei, me pintei, me pintei, me pintei (その後、自分を化粧し続けた)
Cantei, cantei (歌い続けた)(“Bastidores”, Cauby Peixoto)
14. Marta aprontou-se, aprontou-se e depois resolveu não sair mais. (マルタは、時間をかけて支度した後、もう出かけないことを決めた。)(Travaglia)

3. 1. 2 主体の内的情態を表す動詞

以下の用例は、主体の内的情態を表すものであり、内的情態動詞は、動作動詞と同じく限界性がないものである。完了過去形が出来事を完成的に捉えるのに対し、完了過去形の繰り返しは、情態が続いた期間に焦点を当てて、15では「愛していた」、16では「夢を見ていた」という主体の内的情態が長く続いたことを表している。

15. Amei, amei, amei, mas ele me ignorou. (ずっと愛し続けたけれど、彼は私を無視した。)(母語話者)
16. Sonhou, sonhou, sonhou, e enfim realizou. (夢を見続けて、そしてようやく叶えた。)(母語話者)

3.2 限界動詞

限界動詞は、語彙的な意味において終了限界、つまり、動作が終わりの限界へ到達すると出来事は完結し、それ以上進展できなくなるような時間的な境界を持つ動詞である。本稿では、主体の変化を表す動詞、主体の動作及び客体の変化を表す動詞、変化をもたらさない主体の瞬間的な動作を表す動詞の三種類に分類している。限界動詞では基本的に完了過去形の繰り返しは、動作が反復的に行われたことを表すが、次に述べるように主体の変化を表す動詞の場合は用法が異なる。

3. 2. 1 主体の変化を表す動詞

収集した用例の中で主体の変化を表すものがなかった。このタイプの動詞で完了過去形の繰り返しが使われにくい理由として、まず限界動詞の完了過去形は出来事が完結したことを表すため、<継続>の意味を表すことができない、また、同じ主体が何度も同じように変化をすることが不可能であるため、同じ主体の変化を表している限り<反復>の意味を表すことができないからである。例えば、一人の男の人が何度も死んだとはいえないため、次のような用例は非文法的である。

17. *O homem morreu, morreu, morreu. (*男の人は、死んだ、死んだ、死んだ。)

ただし、18と19のように、接続詞 *que* を伴って完了過去形の繰り返しが使われることがある。この場合は、「*foram que foram* (=気合を入れて行った)」、「*caiu que caiu* (=急激に落ちた)」のように、完了過去形の繰り返しは、アスペクチュアリティではなく、<強調>、<変化の様態>を表す形式である。

18. E foram que foram, andaram que andaram e chegaram na casa do pai de São Francisco. – (O. E. Xidieh)
(彼らは) 気合を入れて行った、歩きに歩いた、そして聖フランシスコの父の家にたどり着いた。)(Travaglia)
19. O preço caiu que caiu. (値段は急激に落ちた。)

3. 2. 2 主体の動作及び客体の変化を表す動詞

主体の動作及び客体の変化を表す動詞において完了過去形は、主体の動作の働きかけによって客体が変化したことを表す。例えば、20の「*fazer*=作る」という動作は、<生産>⁸の意味を表す主体動作客体変化動詞である。動作の対象である「*comida*=食べ物」が出来上がることで動作は限界へ到達し、それ以上展開することができなくなる。したがって、完了過去形の繰り返しは、「*fazer*=作る」という動作が反復的に行われたことを表している。

20. Minha mãe fez, fez comida e mesmo assim faltou. (お母さんは何回も食べ物を作ったけれど、それでも足りなかった。)(母語話者)

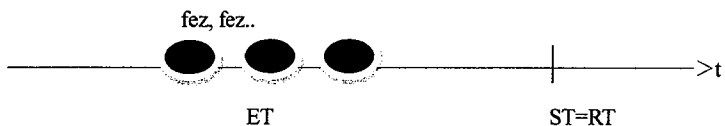
これを例にとって主体動作客体変化動詞における完了過去形と完了過去形の繰り返しの意味的な違いを

図3と図4のように示すことができる。

図3. 主体動作客体変化動詞「fazer」・完了過去形



図4. 主体動作客体変化動詞「fazer」・完了過去形の繰り返し



同じように、21 では完了過去形の繰り返しは、動作が反復的に行われたことを表している。「lavar=洗う」という動作は、終了限界があるため、完了過去形の繰り返しは動作が反復的に行われたことを表している。

21. Eu lavei, lavei essa camisa e a sujeira não sai. (このシャツを何度も洗ったけれど、汚れが落ちない。) (母語話者)

3. 2. 3 非結果的な限界を持つ動作動詞

時間の内的限界はあるが、主体の動作によって客体に何も変化が起こらない動詞がある。このような動詞について、須田 (2003 : 164) は、「あたらしい結果的な状態をもたらすわけではないが、運動がそれ以上進行できないような限界を持つ」と述べている。限界性があるため、このタイプの動詞において完了過去形の繰り返しは反復相を表す。例えば、22 では完了過去形の繰り返しは、「sacudir (=揺さぶる)」という動作が反復的に行われたことを表している。

22. Fui ao mercado comprar café

E a formiguinha subiu no meu pé

Eu sacudi, sacudi, sacudi

Mas a formiguinha não parava de subir

(マーケットへコーヒーを買いに行った、小さな蟻は私の足に上った、私は何度も(足を)揺さぶった、でも小さな蟻は上り続けた。) (“Formiguinha”, Sucessos da Minha Escolinha)

同様に、23 では「bater (=殴る)」、24 では「tocar (=鳴る)」と「chamar (=鳴る)」の完了過去形の繰り返しは、動作が反復的に行われたことを表している。⁹

23. O ladrão bateu, bateu nas vítimas. (泥棒は何度も被害者たちを殴った。) (母語話者)
24. Hoje o despertador tocou, tocou, tocou, mas não consegui levantar de tão cansada que estava. Daí eu tentei te ligar pra avisar que me atrasaria, mas o telefone chamou, chamou e ninguém atendeu. (今日、目覚まし時計は何度も鳴ったけれど、とても疲れていたので起きることができなかった。そして、遅れることを伝えようと思ってあなたに電話をした、でも、電話は何度も鳴ったけれど誰もとらなかった。) (母語話者)

4. 限界的な動作

須田 (2003 : 162) が述べるように、「無限界動詞であっても、文のなかで、言語的な作用をうけて、限界的な動作をあらわすことがある」。ポルトガル語では目的語、状況語などによって無限界動詞の指し示す動作を限界づけることがある。例えば、「andar=歩く」という動詞はもともと無限界動詞であるが、「andar até a estação=駅まで歩く」のように目的地を規定すると「歩く」という動作に終了の限界が与えられる。駅にたどり着けば、動作が限界へ到達するのである。このように動詞の意味に<限界性>が与えられた文では、完了過去形の繰り返しは、反復相を表す。以下、用例を比較してみよう。

25. Eu li, li, li a noite toda e não consegui dormir. (一晩中ずっと読み続けて、寝られなかった。)
26. Eu li, li, li seu email, mas não entendi nada. (あなたのメールを何度も読んだけれど、何も理解できなかった) (母語話者)

25では「li, li, li」という完了過去形の繰り返しは、過去のある時点において「読む」という動作が続いたことを表している (図5)。動作がどこで終わっても「読んだ」という出来事が成立したといえ、「ler」は<限界性>を持たない無限界動詞である。一方、26では完了過去形の繰り返しは、過去のある時点において「読む」という動作が反復的に行なわれたことを表している (図6)。形式的に同じ動詞の形であるが、「seu email=あなたのメール」という目的語を規定することによって、「ler=読む」という動作に終了の限界が与えられる。メールを最後まで一度読めば、動作は限界へ到達し、出来事は成立する。逆に、動作を途中で中断すれば、出来事が成立したとはいえない。「あなたのメールを読む」という動作は、必然的に終わりの限界へ尽きるものであり、「li seu email」という出来事が事実として述べられるには、動作は限界へ到達していなければならない。したがって、完了過去形は動作が一度成立したことを表しており、その繰り返しは、動作が何度も繰り返し行なわれたこと、つまり、反復相を表している。図に示した通りである。

図5. 無限界動詞 (主体動作動詞) 「ler」・完了過去形の繰り返し

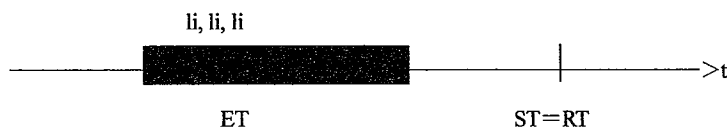
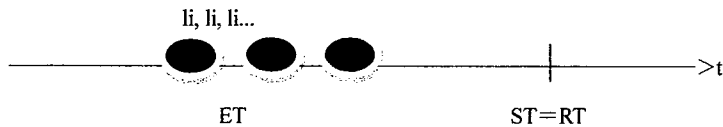


図6. 限界的な動作「ler seu email」・完了過去形の繰り返し



以下、27と28の用例も、動詞外的に動作に限界が与えられたものであり、いずれも動作が反復的に行なわれたことを表している。確認のため、数人の母語話者に文の意味について尋ねたが、やはり全員が<継続>ではなく、<反復>の意味を表すと答えた。波線部で示しているように27では「理由を説明した」、28では「15ページを勉強した」と目的語によって動作が限界づけられている。それぞれの文の意味が成り立つには、一回一回の動作が限界へ到達していなければならない。

27. Expliquei, expliquei o porquê e mesmo assim ela não entendeu. (理由を何度も説明したけれど、それでも彼女は理解できなかった) (母語話者)
28. Estudei, estudei a página 15, mas não caiu na prova. (15ページを何度も勉強したけれど、試験に出なかった) (母語話者)

5. まとめ及び今後の課題

以上、用例で確認できたようにポルトガル語の完了過去形の繰り返しは、アスペクチュアリティを表す文法的手段である。動詞の限界性と完了過去形の繰り返しを表すアスペクチュアルな意味との関係を考察した結果、仮説の通り、限界性(=終了限界)がない場合は継続相を表し、限界性(=終了限界)がある場合は反復相を表すといえる。開始限界の有無によるアスペクチュアルな意味の違いは特になかったが、単に終了限界の有無だけを基準にして<限界動詞>と<無限界動詞>という動詞分類にすると主体変化動詞と外的な限界を持つ動詞の用法が理論上説明できなくなる。そのため、開始限界と終了限界の両方を考慮して表1のように下位分類することは極めて重要である。

表1. 動詞のタイプと完了過去形の繰り返しのアスペクチュアルな意味

動詞のタイプ	限界性の有無		継続相	反復相
主体動作動詞	【+開始限界】	【-終了限界】	○	×
内的情態動詞	【-開始限界】	【-終了限界】	○	×
主体変化動詞	【-開始限界】	【+終了限界】	×	×
主体動作客体変化動詞	【+開始限界】	【+終了限界】	×	○
非結果的な限界を持つ動詞	【+開始限界】	【+終了限界】	×	○
外的な限界を持つ動詞 ⁰	【+開始限界】	+【終了限界】	×	○

今後は完了過去形の繰り返しを継続相または反復相を表す他の文法的手段(形態論的)、語彙的な手段(動詞、副詞)と比較する必要があるだろう。また、アスペクト以外の観点から分析し、<継続期間の拡大>、<状況の強化>の意味、動作の様態など、完了過去形の繰り返しのモーダルな意味の記述も今後の課題である。

¹ 上智大学外国語学部ポルトガル語学科常勤嘱託講師

² 【Ps】は、Pretérito Perfeito Simples (=完了過去形)の略である。

³ 工藤(2014: 64, 66)は、「主体動作動詞は、必然的終了限界はなく、<開始の時間限界>の方が焦点化される」、「主体動作客体変化動詞は、客体の変化が達成されて必然的に動作が終了する<終了の時間限界>が明確にあるとともに、主体が意志的に動作を発動する<開始の時間限界>もある」、「主体変化動詞では、変化が達成される<必然的終了限界>の方が焦点化される」としている。

⁴ 【Ps, Ps, Ps, Ps...】のように動詞の形が4回以上繰り返されることもあるが、アスペクトの観点からすれば、【Ps, Ps】、【Ps, Ps, Ps】と同じである。4回以上の繰り返しは、継続期間の長さ、または、反復回数の多さを強調するものであり、アスペクチュアリティに加えて出来事に対する話し手の気持ちや出来事の捉え方を表すといえる。

⁵ Travaglia (2006:190)は、ficar から成る動詞迂言表現について、quando o verbo “ficar” se apresenta com o significado de “permanecer ou conservar-se em determinada situação”, a perífrase marca o aspecto **durativo** と述べている。つまり、この動詞迂言表現は継続相を表すものである。

⁶ ET、ST、RTはそれぞれ event time、speech time、reference time の略である。

⁷ 再帰動詞は主体の動作による主体の変化を表す動詞である。主体に変化をもたらすため必然的終了限界があるともいえるが、「pintar-se」と「aprontar-se」の場合は、動作が中断され、「化粧が出来上がる」、「支度ができる」段階へ到達しなくても出来事が成立したといえるため、無限界動詞である。

⁸ 本稿では、工藤(2014:216)に倣って「生産」という用語を使用している。

⁹ これらのように瞬間的な動作を指し示す場合、<反復的な動作>=<多回的な動作>ともいえる。

¹⁰ 外的な限界を持つ動詞の場合、動詞そのものは【-終了限界】であるが、目的語、状況語などの外的な要素によって限界づけられた動詞であることを意味して+【終了限界】と示している。

【引用・参考文献】

奥田靖雄(1988)「時間の表現(1)」『教育国語』94 むぎ書房(pp. 2-17)

_____ (1988)「時間の表現(2)」『教育国語』94 むぎ書房(pp. 28-41)

工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房

_____ (2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房

須田義治(2003)『現代日本語のアスペクト論』海山文化研究所

BASSO, R. M. Telicidade e detelicização. In: *Revista Letras*, n. 72, pp. 215-232. Curitiba: Editora UFPR, 2007.

CASTILHO, A.T. de. *Introdução ao Estudo do Aspecto Verbal na Língua Portuguesa*. Marília: Alfa, 1968.

TRAVAGLIA, L.C. *O Aspecto Verbal no Português a categoria e sua expressão*. 4.ed. Uberlândia: Edufu, 2006.

WACHOWICZ, T. C. Telicidade e classes aspectuais. In: *Revista do GEL*, v. 5, n. 1, pp. 57-68. S.J.do Rio Preto: 2008.